



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.107

2012.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

26

「みんなが良ちゃんと呼ぶ 高橋良治さん」

私と同じ年に高橋さんは二部考古学講座生として入学した。昭和元年生、私より9才年上、海軍航空隊で軍人生活を体験している。私からみれば兄というより大人でした。岡本勇さんより4才年上だが、岡本さんが良ちゃんと呼び始め、みんなも良ちゃんと親しみを込めて呼ぶようになった。私との出会いは思い出せないが、生徒の溜り場である考古学陳列室の遺物整理室と思う。すぐ親しくなった。良ちゃんも「俗に馬の合った仲というか、神村君との思い出は多い」と書いている。卒業後も信州に遊びに来たのは塚田光君と良ちゃんだけである。50、60、70才と年を重ねても電話では良ちゃんと呼んでいる。

私たち同年代が心から打ち解けて一体感を持つようになったのは、2年生の考古学実習の名古屋市西志賀貝塚の調査でした。7月11～20日 途中大雨で中断 27～8月4日までの19日間 遺跡近くの寺本堂での雑魚寝の合宿。雨期で毎朝トレンチに溜まっている水を汲み出しての苦労した発掘。庄内川での水遊び。本堂での検討会と夜遅くまでの語らい。現場には阿部知二が朝日新聞夕刊連載『朝の鏡』の取材で、調査が活字となって載ったので夢中になって読んだ。課題を持って望んだ調査結果は分担して報告会で発表した。こうして同年意識が深まった。

昭和28年12月 私の下宿に遊びに来た愛知大芳賀陽さんと、中山淳子さん、倉方春子さん 塚田光君 渡辺兼庸君等と鎌ヶ谷の良ちゃんの所へ行った。良ちゃんの採集土器を見、近くの中沢貝塚を訪ね、畑に散在する貝、初めての貝塚発掘を体験した。

整理室に夜遅くまで残っているのは岡本さんと私でした。良ちゃんは電気がついてのを見たから

と上がってきた。岡本さんを囲んで二部の学生たちと考古学談義。ある夜、良ちゃんは中学校事務職の給料とり、僕がおごると言い岡本さん、中山さん、良ちゃん、私とで神田ガード下の飲み屋に行った。話題の中心はいつも岡本さんで考古学だけでなく人生論にと時を忘れて話し込んだ。

29年7月 二部学生の信州研修旅行を私と松沢亜生さんと案内した。24日宮坂英弼先生宅尖石館で尖石遺跡出土の遺物見学。25日藤森栄一先生宅やまのやで資料見学と先生の話を聞く、先生のおゴリでざる蕎麦を食べ、ざるの枚数を競った。26日飯田へ

私の資料室を見 舟で天竜下りをして解散。2泊3日の同行で二部の学生とぐっと親しみを増した。3年生に良ちゃん・倉方さん・藤本兼子さん・小沢義人君、2年生に鈴木千枝子さん、1年生に大山恵子さん(芹沢さんと結婚)がいた。この研修で良ちゃんを中心に纏まり学習会や一考だけだった雑誌を作った。

二人だけの思い出は31年1～2月 卒論提出後 卒論を返してもらい私は誤字訂正、良ちゃんは未刊の書上げと陳列室に机を並べて幾日か頑張ったことである。

良ちゃんは38年 塚田君と下総考古学研究会を立ち上げ縄文中期土器の研究を進めた。集まった仲間と共同研究で取り組み、学史や遺跡・遺物を中心に一人一人がテーマを持って研究し、発表し、討論する例会を重ねた。結果 会員の一人一人が研究者として立派に巣立ち独り立ちした。

私がクラブで指導した中学生で高校・大学と考古学に進んだのは一人しかいなかった。野村一寿君で早大に入学した。早速塚田君に連絡し下総考古学研究会の仲間に入れてもらった。野村君も頑張り、卒業後は長野県埋蔵文化財センターに就職した。彼の焼町式土器の論文は研究会で学んだ成果である。



▲尖石で(前列中央 宮坂先生
後列左端 神村、2人目 良ちゃん)1954.7



▲西志賀(後列右より2人目 良ちゃん、
前列中央 杉原先生、前列右端 神村)1953.8



▲庄川の土手で(神村、田中、渡辺、高橋)
1953.7.13

*巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

目次

■田舎考古学人回想誌	みんなが良ちゃんと呼ぶ 高橋良治さん	神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイバレット・サイト(第100回) 野崎拓司 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(第5回)	石井則孝 …2	■考古学者の書棚	『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』猪狩俊哉 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(第5回)

石井 則孝

《Mr.オープン屋—その1》

はじめに

私は、考古学を専門とした学徒であるが、美術史・建築史に対しても深い関心をもって取り組んできた。その関係から博物館学の専門家ともなり、駒澤大学に始まって昭和女子大では、非常勤ながらも、70才の停年まで23年間教壇に立ってきた。

私の勤務場所は、東京→奈良→千葉→東京へと転々と移り変っていった。この間、自分の専門を超えて博物館・美術館・埋文センター等の新設に係わるとい一大プロジェクトに参画することが出来、この経験から最終的に五館をオープンさせるというラッキーボーイでもあった。

私は、横浜国立大学教授であった建築学の河合正一氏を知ることとなり、建築学全般にわたり、かなり広く教をいただいていた。参考書としては、昭和50年代の前半は、『建築学大系37』の建築学史・建築実務 昭和51年(1976)と『東京国立博物館百年史・資料編』昭和48年(1973)の2冊、さらに、関野 貞著『支那の建築と芸術』昭和13年(1938)と『日本の建築と芸術』昭和15年(1940)を読み、加えて大変役立ったのが『新建築学体系30 図書館・博物館の設計』昭和58年(1983)の5冊を大事に参考図書として使用してきた。勿論、棚橋源太郎の書は読んでいたが、若い伊藤寿朗さんの『市民の中の博物館』から示唆に富む多くの課題をいただいた。

東京という良い環境に居住していたこともあって、昭和50年頃は、デパート展の全盛の時代であった。各種の展覧会が催され、多くの名作にも出会うことができた。情報量の豊富な時間を過ごすということは幸せなことで、新博物館・美術館のオープンがあると余程の遠距離ではない限り出掛けに行っていた。

1. 最初の仕事

出土木製品の保存・保管の作業を担当し、その木製品の処理と保存方法について色々な試みを行っていた。昭和40年代前半に、冷凍真空乾燥機が生み出され、小物(特に木簡)はこれで処理し、大きな木材は、セキスイ化学の応援を得て、処理槽の製作や木の材質によって違う薬品の浸透やその為の温度・湿度・時間帯等色々な角度から研究し、虫やカビの発生という難問に対しても苦心していた。

次に考えていたのが発掘された大量の遺物をどのように保管したら有効か、つまり収蔵庫・収蔵棚・収蔵ケース等の問題であった。大量に発見される瓦類、保存処理した後のそれらの保管場所、昔は、瓦塚として元の場所へ戻すこともあった。平瓦・丸瓦の保管には、場所さえあれば、連続して簡単に作れる馬房が有効のようである。

日本列島全体が、新幹線・高速道路・公団住宅等の大規模建設が開始されてから、開発に伴う発掘調査も必然的に大規模化し、出土遺物は、想像をはるかに超える量で、本格的

な収蔵庫を作っても足りないので、北海道の藤本英夫さんなどと相談し、廃坑を使ってはどうかとの話がまとまり、実際に調査したところ、どこも漏水が激しく使用は不可能であった。それでは、新幹線や高速道路下の高架下はどうかと考えたが、高架下は塞いでしまうと風が通らなくなり、危険が生じ、使用は不可となり、全ての計画は失敗に終わってしまった。

結局収蔵箱(ケース)の工夫しかなく、人間が持てる範囲のケースが最良となり、現在使われているプラスチックの三種類の平箱に落ちついた。現代では、平箱で最っとも使われているのが一番薄いものである。

2. 博物館に関する基本的な考え

博物館機能は、基本的には展示場所と収納施設があれば第一義的には間に合う。近代博物館の機能としては、ヒト→モノ→タテモノの関係が確立していれば、その存在価値は高いものと判断している。この関係が常に保たれていることこそ博物館の存在が市民の中に生きているという考えをもっている。田中角栄の列島改造論が流布されていた景気の良い時代、文化会館・体育館が全国的に建設され、最後に博物館・美術館が造られていった経過がある。しかし、地方公共団体は、ヒト・モノが無いにも拘らず、建物だけを先行させ、あげくに専門職員(学芸員)集めに奔走していた。その次にモノ集めに困ると、展示品が無いからといって、レプリカ製作に夢中になっていた。佐倉の歴博の三角縁神獣鏡の展示に悪い例が今も残っている。このレプリカ問題は長い間の頭の痛い問題であった。にわか学芸員とレプリカ製作会社の繁栄が10数年続いていた。モノあつての博物館、ヒトあつての博物館が基本である。このことは現代でも変わらず、大英博物館の歴史を紐解けばすぐにわかることである。本物・良い物があつてこそ眞の博物館であると常々述べてきたが、今でもレプリカを喜こんでいる関係者がいることは誠になさけない現実である。

3. 設計者と学芸員との関係

私が関係してきた新設の博物館の中には、日本を代表する建築家や新進気鋭の設計者も居て、建物を使用する私(学芸員)としては、相当の覚悟で設計者にあたらねばならなかった。設計者と学芸員との間にはかなりの思考の違いがあて、時々問題が生じていた。設計者は学芸員の仕事の範囲にまで干渉し、使用者側の立場を無視しての設計を押しつけてきたこともあった。

これに対し私は、「あなたは建物の設計者、この建物を使うのは私ですよ」と押し返し建設に携わってきたが、このバランス感覚を失うとたちまちのうちに切り込んでくる機会

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

が間々あった。ある時、便所の設計で私と設計者との意見が合わず、建築が始まっているのに2ヶ月間も当人が現場に現れず、弟子まかせて困ったことがあった。やがて、私の実績を知ってようやく納得し、最高のウイスキーを下げ頭を下げて現われた時ほどホットしたことはなかった。悦ばしい限りである。

以下、私が設計者との意見が合わず議論の中で解決していったいくつかの事例を記してみたい。

(イ) 建築物の材質について

近代建築の基本的材料は、鉄・セメント・石・レンガ・ガラ

ス等である。日本には四季があり、夏と冬とでは、相当な気温差が生じる。C美術館の玄関を造った際、鉄骨総ガラス張りで、床面は石敷き、暖房を入れると外気との温度差が20℃以上、当然ながら内部は水滴で一杯、周囲に排水溝を作っても足りず、現在もガラス面はくもり、春秋は、なんとか建物全体とのバランスはとれているものの、夏・冬は厳しい現実である。建物と雨水の関係は普通の住宅でも台風・大雨の際は大いに困った方が多く居ると思うが、現実的にはどのように解決しているのだろうか。私は自宅の壁で今でも苦労している。

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

U レーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 100 城久遺跡群 ~ 鹿児島県大島郡喜界町

野崎 拓司

城久遺跡群のある喜界島は、鹿児島県本土から南へ約380km、沖縄から北へ約330kmのほぼ中間地点に位置し、奄美大島から東へ約25kmの太平洋上に浮かぶ島である。琉球石灰岩を基盤層として、奄美大島側に向けて緩やかな海岸段丘が形成されている。現在も年間平均約2mm隆起を続けている若い島であるため、高い山がなく、河川はほとんど発達しておらず、海岸部ではリーフは発達していない。

城久遺跡群の調査は県営畑地帯総合整備事業に起因するもので平成15年から平成21年まで行った。私は平成17年から発掘調査・報告書作成に携わらせていただいている。

遺跡群は島の中央部、標高160mから100mの高台に位置する、山田中西・山田半田・半田口・小ハネ・前畑・大ウフ・半田・赤連遺跡の計8遺跡の総称である。これらの遺跡は本調査・確認調査を行った結果、時間的・空間的にも密接な関連性を持つと考えられたことから、現在の城久集落を中心に展開するそれぞれの遺跡を城久遺跡群として位置づけ、一連のものとして捉えることとした。“ぐすく”という響きを聞くと、沖縄本島などに見られる首里城や今帰仁城などのグスクを連想しますが、前述のような経緯で名称をつけたため、城壁などを持った、いわゆるグスクは喜界島にない。

私が初めて調査を行った標高140m付近に展開する山田

半田遺跡では、夏の暑さや冬の季節風による強い北風、さらにはあられが降ったりと寒さに弱い私にとっては大変でした。冬の季節風は台地の上ではかなり強く感じられ、建物などは頑丈に作らないと倒れそうだなと感じたことを思い出す。

遺構は400棟以上の掘立柱建物跡や火葬・再葬・土葬などの墓、鍛冶炉跡などである。掘立柱建物跡は2×3間の建物跡が比較的多く見られる。その中でも特徴的な遺構として4本柱や2×3間の建物跡の四方を囲む4面庇状の平面プランを持つものがある。この建物跡は遺構数が少なく、周囲に重複している柱穴が少ないことなどから集落の中核的な機能を持った遺構である可能性が高いと考えている。墓には直径1m前後の円形プランの中央部分に蔵骨器(須恵器壺)が置かれている事例や、長軸2m×短軸1m前後の長方形プランの片隅に焼骨塊とともにカムイヤキ壺・白磁椀皿・鉛ガラス玉・刀子などが副葬されるものがある。この他、土葬のみで副葬品を伴わないものもあり、古代末~中世にかけての喜界島・奄美地域での土坑墓の変遷をよくうかがえる資料である。大ウフ遺跡では鍛冶炉跡が集中して出土している地点が見つかっており、鍛冶工房的な機能があったと推定される。

遺物は古代と中世に大別でき、古代では土師器・須恵器・焼塩土器・滑石製石鍋・越州窯系青磁・白磁(大宰府分類I・XI類)などが出土している。越州窯系青磁や白磁I類など初期貿易陶磁器がまとまって出土するのは奄美地域では初事例である。中世前半では白磁(IV・V類中心)・滑石製石鍋・カムイヤキ・初期高麗青磁・朝鮮系無釉陶器などが出土して

いる。当該期は城久遺跡群の最盛期に当たり、南島最大規模の中世集落が形成されたと考えている。中世後半では龍泉窯系青磁を中心とした遺物組成である。遺跡群の中でも標高の1番低い100m前後の台地上に展開する。



東シナ海側から城久遺跡群を望む



土坑墓副葬品出土状況

4本柱建物跡の平面プランが正方形から長方形へ変化するなどの変化も見られる。

城久遺跡群の発見によってこれまでよく分かっていなかった古代末～中世前期の様相が明らかになりつつある。特に

古代末に関してはキカイガシマの問題も含め、文献史学などの成果も援用しながら遺跡の価値づけを進めていきたい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは石堂和博さんです。

考古学者の書棚

「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として」

宇野隆夫／桂書房(1991)

猪狩 俊哉

本文を起すにあたって、粗末ですが愛着のある我が家の本棚を眺めてみました。まとまりのない書籍や文献のコピーの陳列の中には、これまで調査に携わってきた遺跡に関するもの、自分の興味のあるものなど、それぞれの書籍には自分にだけわかる思い出があり、改めて自分のこれまでの歩みを振り返ることができました。

その思い出が特に印象深く刻まれた書籍が、ここで紹介する宇野隆夫先生の『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』です。

私が考古学を学び始めたのは、今から十数年前の大学に入ってからです。高校時代に漠然と考古学への興味が湧き、よく知らない土地の大学を受験して、その大学の考古学研究室に何とか入り込むことができたのが、私の考古学を始めるきっかけでした。

漠然としたイメージしかなかった考古学でしたが、実際に学び始めると、毎日が本当に楽しく充実して、日に日にその魅力に惹かれていきました。研究室の先輩も勉強熱心な方ばかりで、常に私に対して考古学や考古学以外のことについてもご指導を下さり、それが現在の私の骨格となったと感じています。当時、考古学について何も知らない私は、考える余地など無く先輩方からの指導を鵜呑みにし、それを基に何事も行動していたように覚えています。ただ一つだけ反抗していたことがありました。それは、読書すること、つまり書物から考古学の理論や方法などを学ぶことでした。

二十歳前後の私は、どういったわけか、考古学に限らず「家の中で本を読む暇があれば、何事も外に出て、見て、触れるべきだ」と信じ込み、行動していました。

紹介の本は、私が大学に在籍した当時の考古学の担当教官であった宇野隆夫先生が著したもので、当然のごとく研究室の先輩方から、その1冊を持って勉強に励むべき旨を指導されていました。ところが、当時の私は、先に申し上げたとおり、読書することについて訳のわからぬ信念を持っていたために、本はほとんど読みもせず、古代律令期を研究テーマにしていた研究室の同輩に譲ってしまいました。研究室の先輩方は言うに及ばず、本文に目を通された皆様の呆れた表情が目には浮かびます。ちなみに宇野先生は、私が考古学研究室に在籍し始めて間もなく、大学をご退職されたので、先生から直接ご指導を受けることはほとんどなく、私が覚えているのは、先生の朗らかな表情ばかりです。

私の恥ずかしい話はさておき、本書では、大量の考古資料を様式的研究の観点から分析し、古代律令期における北

陸地方の実像の復元を目標として掲げられています。書名に示されたとおり、北陸地方を分析の対象としていますが、その研究視点は、同時代の別地域における研究においても採用できるものとなっています。

本書の構成としては、まず研究の課題と方法が示され、次に北陸の自然・人文的環境に触れてから、考古資料の集成と分析を行い、それらから得られた画期とその具体相に至り、最後に律令社会の実像と歴史的意義を示して結ばれています。対象とした考古資料は、集落、埋葬、生産と流通、食器であり、それぞれはさらに細分され、多岐に亘っています。

現在、私は古代律令期に形成された官衙関連遺跡の調査に携わっておりますが、本書に示された研究の視点は、その官衙関連遺跡の研究を進めていく上で、とても参考になるものだと感じています。

ところで、冒頭に申し上げた私の恥ずかしい話にはもう少し続きがあります。

本書を手放した数年後の私は、臨時の職を転々としながらも考古学に触れていく中で、当たり前のように、考古資料を実見することと書物を読むことを研究の両輪とする重要性を知ることになりました。後悔先に立たずで、本書が必要になったころには、なかなか簡単には手に入れることができなくなっていました。そのような状況で、さらに何年か過ぎ、気づけば私は、同じ大学の研究室で学んだ女性と所帯を持つことになりました。彼女は私と一緒にした時にはすでに考古学に携わらなくなっていました。本書のもつ重要性を理解し、きちんと本書を保管していました。そういった経緯で本書は、現在私の本棚に並んでいるのです。不勉強な私は、書棚に収められた書物だけではなく、これまでご指導を下さった諸先輩の皆様や家族によって支えられているのだと、いつも感じています。

本書は、古代律令期の研究視点を模索されている方や、あるいは私のように止むを得ない事情で本書を読む機会がなかった方に、是非お勧めいたします。

アルカ通信 No.107

発行日 2012年8月1日
 発行人 角張淳一
 発行所 考古学研究所 (株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>